日本建築学会大会学術講演梗概集
（北海道） 2013 年 8 月

香取市佐原地区における人々の記憶に関する研究

正会員 ○ 越村高至＊

重伝建　歴史的町並み　記憶
舟運　佐原　小野川

1．研究の背景と目的

1.1. 背景

香取市佐原地区は千葉県の北部に位置し、江戸期に利根川水運とともに商業のまちとして栄えた。商家の町並みを残しており、1996 年には関東地方で初めて重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定された。重伝建地区では歴史的建造物の保存・修復が行われており、主に建築物の外観の修景が重視されている。また、7 月の八坂神社の祇園祭および 10 月の諏訪神社の秋祭は佐原の大祭と呼ばれ、重要無形民俗文化財となっている。これらを目当てに佐原を訪れる観光客は多い。

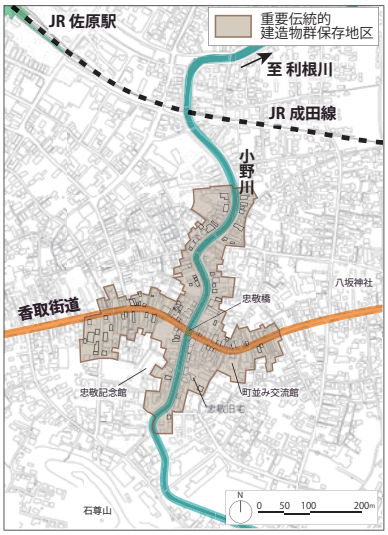

図 1　佐原地区中心部の地図

1.2. 佐原の「まちなか」における課題

一方で、佐原の位置する香取市の観光客入込数は平成 23 年度に減少に転じた[*1]。今後の佐原の観光を考える上で、重伝建地区の町並みに頼るのみではその持続可能性は望めない。形としての建物、町並みの維持だけでなく、それらに纏わる「物語」や、重伝建地区の外側にある資源を伝えていくことで観光地としての深みを生むことが出来ると考えられる。また、重伝建地区内に関しては住民の生活に根ざした生きた観光地でなければ町並みのテーマパーク化を招き長期的な視点での観光地としての魅力は低下するだろう。このような課題を解決していくことは、最終的には観光地としての側面だけでなく、住民にとっての暮らしやすさを含めた「まちなか」の豊かさにつながると考えられる。

1.3. 記憶を継承する意義

以上の課題に対し、史実にあまり記録されない事柄を人々の記憶として記録し整理することは、歴史的町並み以外の資源発掘につながり、佐原の住民、観光客のまちへの愛着を増進させる上でも有効であると考えられる。本研究では昭和初期から現在にかけての佐原の賑わいや暮らしの様子に関する人々の記憶を収集、整理し、そのうち地区中心部を流れる小野川に関する記憶についてまとめる。

2. 小野川の沿革

多くの歴史的建造物が残り観光客が歩いている姿がよく見られる小野川沿いだが、かつては舟運、商業といった生業に利用される空間であったほか、舟運衰退後も生活の場として利用されていた時代があった。

2.1. 江戸時代

佐原は利根川水運の中継地点として役割を果たし、小野川沿いには米問屋や醸造業を営む店舗が並んだ。周辺から物資を集め江戸に運び、江戸から呉服や砂糖、塩等の日常品を運び周辺で売っていた。

2.2. 明治～大正時代

明治 31（1898）年に佐原駅に鉄道が開通する。佐原は物資の集散地として栄えていた。一方で、小野川沿いでは舟の利用が続いていた。また、小野川河口には利根川の洪水逆流による氾濫を防ぐ目的で大正 13（1924）年に小野川橋が完成した。

2.3. 昭和前期（戦前）

昭和 6（1931）年に水郷汽船が発足し「さつき丸」「あやめ丸」が土浦、潮来、佐原、鹿島を行き交い多くの人を運んだが、昭和 8（1933）年に鉄道が延伸し観光船は衰微の道を辿った。また、昭和 11（1936）年には利根川での水郷大橋架橋により自動車交通の利便性が上がり水運機関衰退の決定打となった。

2.4. 昭和後期（戦後）

佐原駅の北側には佐原港があった。水郷の早場米を陸揚げし輸送すべく昭和 26（1951）年に完成したが、自動車輸送への転換により利用はわずか 1 年余りだった。また、昭和 30 ～ 40 年代にかけて、もともと荷揚げ用に作られた小野川沿いの石段「だし」が子供たちの遊び場として利用されたり、洗濯が行われたりと生活の場として利用されている様子が写真に収められている（図 6、図 7）。利根川においては昭和 45（1970）年に塩害防止と水需要への対応のため利根川河口堰が完成している。

3. 記憶収集のためのヒアリング調査

3.1. 調査方法

調査は 2012 年 5 月から 10 月にかけて行った。昭和初期の小野川をはじめとする佐原のまちの姿を覚えていると考えられる 50 代～ 80 代の人計 12 名のもとへヒアリングに伺い、地図や古写真を見せながら小野川に関する記憶を話してもらい、それを記録するという方法で行った。ヒアリングの現場では地図への情報の書き込みや会話内容の記録は最低限行いながら、過去の記憶を思い出してもらえるように質問することを心がけた。会話の内容はボイスレコー

ダーに録音し、ヒアリング調査終了後に文字起こし作業および地図上でのまとめ作業を行った。

3.2. 調査結果

ヒアリング調査によって得られた小野川に関する記憶をここに列記する。なお、言葉をそのまま表記すると意味が捉えにくいので、内容が変化しない範囲で筆者が修正を加えている。

3.2.1 戦前

【舟運がもたらした賑わいに関する記憶】

「うちは問屋をやっていたから、さっぱ舟にすいかやら、なす、きゅうりを山にしていたのが今でも目に焼き付いている。」

「その前の橋（＝共栄橋＊筆者注）は個人で架けられた橋。向こう側に材木置場があって渡ることができるように架けた。」

図2　立てかけられた材木 *2

「材木は家の前に立てかけていた。北佐原から材木を船で買いにきていた。それで商売繁盛していた。」

「小野川沿いに材木屋があるのはまちが繁盛すると多くの材木が必要になるから。茨城南部・千葉北部は材木になる木が一本もない。金持ちは東京から、その他は筑波山の向こうから土浦まで持ってきてそこから舟できた。」

図3　高く積まれた上米 *3

「水田から収穫した米のうち納める分は各家の前の川沿いに山のように積み上げられた。お百姓さんがいくらの割合を納めるのかというのは決まっていたから、この山の大きさがそのまま財産のインディケーターになった。昭和の初期はまだ行われていた。」

【水郷の観光に関する記憶】

「200 ～ 300 人くらい乗ることができる水郷汽船の船が小野川河口に着けられていた。」

「ここらの修学旅行はみんなその船にのって銚子までいった。」

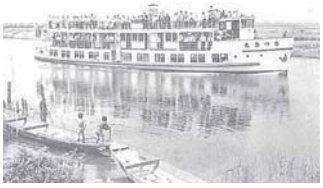

図4　汽船さつき丸 *4

3.2.2 戦後

【水郷地帯の交通に関する記憶】

「利根川の向こう側はずぶずぶな川を埋め立てて作った『シマ』だった。みんなそこからさっぱ舟に乗って佐原に買いに来ていた。なんでもかんでもさっぱ舟は使っていた。こういうのがなくなったのは終戦後 10 年くらい。」

【佐原港に関する記憶】

「佐原港の河原に力士を呼んで相撲で人を集めていた。学校の帰りは友達と河原に座って石を投げながら電車を待ったりしていた。」

図5　佐原港

【川での遊び、生活に関する記憶】

「だしは河川占用料を個人で県に払っていた。占用料がたいした値段じゃなかったから、皆残していた。」

「子供の頃は石ころとかで川を堰止めしてね、それで魚を採ったり。あと川蟹なんかも居ましたね。網で採っていました。」

「シジミや蟹をとって遊んでいた。川は危ないからと泳ぐのは禁止されていたが遊んでいた。その頃は今よりも水が豊富だったが藻で底は見えなかった。東京から釣りの会の人も来ていました。」

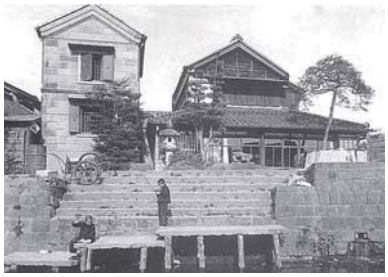

図6　だしで釣りをする子供たち *6

「投網を家の前に干していたんです。舟で投網持って利根川の方に行って趣味で魚をとっていたので。」

「小野川で洗濯をしている人もいました。小野川で洗濯をするのは川沿いの人。」

「佐原のシジミは小さかったが、笹川（佐原より利根川の下流）から農家が舟でシジミを売りに来ていた。笹川まで下ると潮がさしておいしくなったらしい。」

図7　小野川での障子洗い *7

4. まとめ

小野川に関する記憶の調査から得られた情報は以下のようにまとめられる。

4.1. 資料に裏付けられる情報

古写真等からも伺えるまちの様子を語る話は多く聞かれた。特に小野川の、舟運や商業の場としての側面だけでなく、より生活に根ざした場としての側面を確認することができた。話題になる場所はそれぞれの語り手にとって印象に残っている場所に関連していると考えられ、複数人の記憶を合わせることで、その場所の印象の強さ、まちの人々にとっての場所の重要性を把握できる可能性がある。

4.2. 資料に裏付けられない情報

一方で、古写真等の情報を新たに補足する内容となる話も聞かれた。その場所の印象の強さ・重要性もさることながら、高く積まれた上米が意味を持っていたように空間の形態・利用方法が反映する意味も読み取ることができる。

参考文献

1) 千葉県商工労働部観光企画課「平成 23 年　千葉県観光入込調査報告書」2011 年

2, 3, 6) 佐原市「佐原の町並み資料集成」2004 年

4) 千葉県立大利根博物館「写真集　水郷の原風景」1995 年

5) 佐原市総務部自治振興課「佐原あの日あの時　市制４０年のあゆみ」1990 年

7) 伊東五郎，高森良昌「写真集 明治大正昭和 佐原 小見川 神埼―ふるさとの想い出 289」1984 年

8) 佐原市「佐原市史」1966 年

＊東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　修士課程　　*Master course, Graduate school of Faculty of Eng., The Univ.of Tokyo